



Title	ラーキンの太陽 : High Windows の詩をめぐって
Author(s)	白川, 計子
Citation	Osaka Literary Review. 1994, 33, p. 164-175
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25492
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ラーキンの太陽

— *High Windows* の詩をめぐる —

白川 計子

1974年に出版されたラーキン最後の自選詩集 *High Windows* はそれ以前の詩集に比べて難解な詩を多く含んでいる。それらは批評家達によって symbolism, imagism といった用語を付されて論じられ、高い評価を受けている。確かにこの詩集に編まれた24編の詩は、寡作で入念なラーキンが到達した絶頂を示している。そして、芸術理論や運動に背を向け続けたラーキンの、この本来意図しない難解さ、曖昧さは、時として一般読者を困惑させるものでもある。ただし、この難解さはフランスの象徴詩やモダニズム詩の技法の理解によって、あるいはその影響、投影を見ることによって解けるものではない。ここに読者が見いだすのはラーキン独自の技巧が生み出した飛躍であり、言葉の魔術であり、計算された意味の重層性である。

本論ではラーキンの太陽をめぐるイメージを中心に難解とされる数編の詩を分析したい。

まずタイトル詩、“High Windows” を読んでみよう。五連からなるこの詩はラーキン流のショッキングな colloquialism で始まる。

When I see a couple of kids
And guess he's fucking her and she's
Taking pills or wearing a diaphragm,
I know this is paradise

Everyone old has dreamed of all their lives —
Bonds and gestures pushed to one side
Like an outdated combine harvester,

And everyone young going down the long slide

To happiness, endlessly.

ぼくは若いカップルを目にして
あいつはあの娘とやってるなと思う。娘は
ピルを飲むかベッサリーを使ってるんだろう。
そうさこれは天国だ

年寄りが生涯ずっと夢見てきた天国 …
社会のしがらみや体裁は
旧式のコンバイン刈り取り機のように無視されて
若者はみんな長い坂をすべり降りる。

幸福に向かって、果てしなく。

卑俗な用語を使って慎み深い読者の体裁をまず打ち砕くこの書き出しは、あの有名な “They fuck you up, your mum and dad” ではじまる “This Be the Verse” をはじめ、詩集 *High Windows* に頻出する技法である。この詩的洗練とは程遠いような悪趣味な率直さは、上品な社会へのアイロニーと自己冷笑の詩に使うとき、鮮烈な効果を持つ。この詩においても、現代の若者の性の解放にまゆをひそめながらも嫉妬する年配の世代を代表して (Everyone old) “私” は語り、考える。

I wonder if
Anyone looked at me, forty years back,
And thought, *That'll be the life;*
No God any more, or sweating in the dark

About hell and that, or having to hide
What you think of the priest. He
And his lot will all go down the long slide

Like free bloody birds.

四十年前には

みんなが僕を見て思ったのだろうか。

「あれが人生ってものだ。

もう神様もいなければ、地獄やなんぞと怖がって

暗がりや冷汗かくこともない。僧侶をどう思ってるか

隠さなかったっていいんだ。あいつや

あの連中は自由なクソツ鳥みたいに

長い坂をすべり降りていく。」

一、二連で性の罪悪感から解放された現代の若者の実態を *fucking* という若者用語を使って描写したあと、この三、四連では四十年前、詩人の少年時代に起こったもう一つの解放、即ち宗教的罪悪感からの解放が歌われる。宗教がすたれ信仰心のないことが恐ろしいことでなくなった自分たちの生き方を、前世代の大人はやはりまゆをひそめながらも羨ましく思ったかもしれないと詩人は思う。ここにある二つの世代感慨は、比較されることによってもう一つの深い普遍的な感慨を生み出す。それは現在にあっても過去にあっても、幸福への解放と思えたものが、実際にはそうではないという真実である。この真実の提示は第二連の表現にすでに巧妙に仕組まれている。And everyone young going down the long slide / To happiness, endlessly. 幸福への道が上昇ではなく下降のイメージで描かれ、それに向かっているが (to)、到達することのない (endlessly) 長い道だからである。四連の、解放された鳥も空に向かって飛ぶのではなく “go down” 下に降りていくという矛盾するイメージが使われる。

つぎの最終連で視線は上昇し、手の届かない解放のイメージ、高窓が歌われる。

And immediately

Rather than words comes the thought of high windows:

The sun-comprehending glass,
 And beyond it, the deep blue air, that shows
 Nothing, and is nowhere, and is endless.

するとすぐさま

言葉ではなく高窓が浮かぶ
 その陽光をとりこむガラス
 そしてその向こうに、深く青い空、それは何も
 示さず、どこでもなく、そして終わりもなし。

この最終連は唐突で不明瞭なイメージと評されることが多いが、四連までの上述の思考の流れの行き着くところとして、むしろ詩的な明晰さというものを持っていると言えるだろう。つまり、論理から視覚へと、即ち、思考から情緒へと飛躍する、まさに詩を詩たらしめる展開があるのである。ここで注目したい心象表現は“The sun-comprehending glass”である。この行は完成の二年前に書かれていた草稿ノートでは“The sun pouring through plain glass”という平凡なものであった。二年後に書き直された sun-comprehending という表現には、凝縮された美があると同時に重要な音が内在している。それは uncomprehending を思わせる言葉の響きである。高窓への詩人の非論理的に沸き上がった希求とそれに対する太陽の答え、即ち、太陽の側の「理解しない」(uncomprehending) 拒絶が聴覚に響いてくる。そしてその光の向こうには答えのない無が、不在が、永遠が、深く青い大気の中にたたえられているのみである。

バーバラ・エヴァレット (Barbara Everett) はこの最終連にマラルメの重要な symbol である “L’azur” の影響を見、“Les Fenêtres” との関連性を考察し、これをラーキンの symbolist imagery の一つに数えているが¹⁾、ラーキン自身はその影響を否定しているように²⁾、この陽の差す窓のイメージは詩人独自の心象体験から生まれたものである。というのはラーキンが見ていたのは窓や青い空ではなく太陽の光であったからである。

この太陽のイメージは *The Less Deceived* の “Deceptions” にすでに萌芽がある。詩はメイヒュー (Henry Mayhew) の *London Labour and the London Poor* (1851) の中の一人の少女に向けて書かれている。片田舎からロンドンに叔母を訪ねて来た少女は、売春の仲介人に騙されて薬を飲まされ犯される。屋根裏部屋で意識をとりもどした少女は太陽の日差しをみる。The sun's occasional print, the brisk brief / Worry of wheels along the street outside / . . . / And light, unanswerable and tall and wide / Forbids the scar to heal... わけのわからないまま無防備な荒涼とした精神状態の中で少女は窓から差す太陽の光を見る。それは癒しをあたえることも、答えをあたえることもできない高い広い光であった。この太陽の印象はそのまま “High Windows” に引き継がれている。この少女の無力感と高窓を見上げたラーキンの虚無感は同質のものであり、太陽もまた人間的なるものとの断絶の高みに位置している。

ラーキンは詩集 *High Windows* の中でこの太陽のイメージを独立させて省察している。それは imagist poem³⁾ と呼ばれることになる “Solar” である。

Suspended lion face
Spilling at the center
Of an unfurnished sky
How still you stand,
And how unaided
Single stalkless flower
You pour unrecompensed.

.
Heat is the echo of your
Gold.

Coined there among

Lonely horizontals
 You exist openly.
 Our needs hourly
 Climb and return like angels.
 Unclosing like a hand,
 You give for ever.

宙づくりのライオンの顔
 何にもない空の中心で
 溢れつつ
 かくも静かに君はある
 そして一切の助けを受けず
 単一の茎のない花よ
 報いもなしに君は注ぐ

(中略)

熱は君の黄金の
 こだま

淋しい地平線に囲まれ
 金貨となって
 君は開かれてそこに在る
 僕らの要求は刻々と
 天使のように登っては戻る
 手のように開きつづけ
 永遠に君は与える

この詩は paean⁴⁾ とか太陽への hymn⁵⁾ と評されているが、確かに太陽は神格化されている。ここには太陽への畏怖と賛美が無条件に率直に歌われている。ただし、その率直さにも注目すべき点がいくつかある。ライオンの顔、茎のない花、金貨といったイメージは童話を連想させるナイーブなイメージである。このイメージのナイーブさと、極めてラーキンの修辞、“unfur-

nished” “unaided” “unrecompensed” “unclosing” といった、否定形を多用した表現が絡まって、この詩の基調 (tone) 自体を謎めいたものにする。この詩の印象は簡潔で明晰でもあり、不可解でもある。この基調の二面性と共に、謎を与えているものが、動詞の普通でない使い方である。第一連の結びの “You pour unrecompensed” と第三連の、詩の最終行 “You give forever” の動詞には本来あるべき目的語がない。この、何を注ぐ (pour) のか、何を与える (give) のかを省略した表現は、動詞の印象は強めるがロジカルな印象は希薄にする。また、もう一つ注目したいのは、畏敬の対象である太陽の側の孤立状態である。“unaided” “single” “unrecompensed” “lonely” といった表現に見られる太陽の孤立した印象は、太陽への賛美と希求と同時に、人間と太陽との否定しがたい断絶感を伝えている。

太陽は詩集 *High Windows* に至って、自然の一要素をこえた暗示性をもつようになる。次に見る “The Explosion” はこの詩集の巻末詩であり “Solar” に描かれた太陽のイメージが引き継がれている。そしてラーキンの中心主題の一つである死を扱ったものにもかかわらず、“The Old Fools”、“The Building” などと比較して、ナイーブさと明るいいりリズムを持っているのはなぜだろうか。それは冒頭から最後まで太陽が出現していることと無関係ではないだろう。

On the day of the explosion
Shadows pointed towards the pithead:
In the sun the slagheap slept.

爆発のあった日
影は坑口を指していた
日なたでばた山が眠っていた

のどかな小道から朝の静けさを破って鉱夫達がやってくる。そして

One chased after rabbits; lost them;

Came back with a nest of lark's eggs;
Showed them; lodged them in the grasses.

一人が兎のあとを追う。見失って、
卵の入った雲雀の巣を持って戻ってきた。
みんなに見せて、草の上にしっかと置いた。

こうして、親子、兄弟、親しい仲間達の集団は冗談と笑い声に満ちた世界から影の指さす炭鉱の中へと入って行く。そして爆発が起こる。

At noon, there came a tremor; cows
Stopped chewing for a second; sun,
Scarfed as in a heat-haze, dimmed.

正午に、地響きがあった。牛は
一瞬草を食むのを止めた。太陽は
地熱のもやにでも包まれたように、曇った。

注目したいのは、太陽がこの鉱山の爆発事故と、素朴な鉱夫達の死を見届けているかのように、かれらの描写の背後にあることである。キリストの死に太陽が陰ったように⁶⁾、鉱夫達の死は太陽を曇らす。

そして村に残された妻達はその地響きの意味を知る。夫達が死んだことはチャペルにかかれた文字のようにはっきりと女たちに伝えられる。そして詩の結びは彼らの素朴な信仰の証のように明るさと優しさに満ちている。

*The dead go on before us, they
Are sitting in God's house in comfort,
We shall see them face to face —*

Plain as lettering in the chapels
It was said, and for a second
Wives saw men of the explosion

Larger than in life they managed —
 Gold as on a coin, or walking
 Somehow from the sun towards them,

One showing the eggs unbroken.

死者は我らのまえに行き、彼らは
 神の家で安らかに座している
 我らはやがて彼らに会うであろう

チャペルに書かれた文字のようにはっきりと
 それは語られた。そして一瞬
 妻達は爆発の男達を見た

彼らが共に生きたその姿より大きく
 金貨の黄金の輝きをして、そして何故か
 太陽から彼らの方へと歩いてきた

一人が割れていない卵を見せていた。

この詩は一昔前のウェールズの鉱山で働く素朴な男達と妻を題材としている。村々には英国国教会ではなく、非国教会、チャペルがあって貧しい信仰深い人々が、素朴な祈りの日々を送っていた。現代人ラーキンの虚無に病んだ「私」はここにはいない。この詩には“Solar”で賛美した太陽が、特に最終連で重要な暗喩となってあらわれている。女達が死んだ男達の幻影を見たとき、男達は太陽から歩みでて、“Solar”の金貨の姿をしてあらわれる。ラーキンがしばしば歌った恐ろしい死、生にひそむ唯一の真実であり完全な消滅である死はここには無い。男達は神の家に迎えられ、太陽と同化するのである。そして永遠の命と再生が、割れていない卵によって暗示されるのである。

High Windows の出版後、死を迎えるまでの十年間にラーキンは八編の

occasional poem を含む十七編の詩を書いているが、その中でも生涯の詩を総括するような一編が“Aubade”である。最後にこの詩に現れた、いや、現れなかった太陽について考察してみたい。

各連十行、五連からなるラーキンにしては比較的長い詩、“Aubade”は、“The Building”や“The Old Fools”の他者の死ではなく自分自身の死との対峙を描いている。夜中に物音ひとつしない闇の中に目覚めた詩人は刻々と近付いている死に気付く。

I work all day, and get half-drunk at night.
Waking at four to soundless dark, I stare.
In time the curtain-edges will grow light.
Till then I see what's really always there:
Unresting death, a whole day nearer now,

一日中働いて、夜には半分酔っ払う。
四時に静寂の暗闇に目覚め、僕は見つめる。
やがてカーテンの端が明るくなるだろう。
それまで僕は本当はいつもそこにあるものを見る。
休むことのない死、ちょうど丸一日分近付いた死

死は夜の闇の中で存在を現し、朝になるまで詩人は恐怖に捕われる。

そして、永遠の完全な無、我々が向かっている確実な消滅は (the total emptiness for ever, / The sure extension that we travel to) 真っ白な光線となって詩人の心を空白にする。そして、この恐怖を追い払うには永遠の生を説く宗教も (That vast moth-eaten musical brocade / Created to pretend we never die)、ルクレチウスの哲学も (And specious stuff that says *No rational being / Can fear a thing it will not feel*)、勇気も (Being brave / lets no one off the grave) 役にはたたないと詩人は思う。そして最終連で朝が来る。

Slowly light strengthens, and the room takes shape.

It stands plain as a wardrobe, what we know,
 Have always known, know that we can't escape,
 Yet can't accept. One side will have to go.
 Meanwhile telephones crouch, getting ready to ring
 In locked-up offices, and all the uncaring
 Intricate rented world begins to rouse.
 The sky is white as clay, with no sun.
 Work has to be done.
 Postmen like doctors go from house to house.

ゆっくりと明るさが増し、部屋の形が現れる。
 皆知っていて、ずっと知っていて、逃れられないと知りながら、
 しかも受け入れられないもの、それはワードローブのように
 はっきりとそこに在る。どちらかが行かねばならない。
 とかくするうち、鍵のかかったオフィスで、電話が身構えて
 今にも鳴りだそうとしている。そしてあの冷たい
 入り組んだ借り物の世界が目を覚まし始める。
 空は粘土のように白く、太陽はない。
 仕事はされねばならない。
 郵便配達夫が医者のように家から家へと訪れる。

夜が明け、朝の明るさが現実を照らし出すこの最終連は巧みな意味の重層性をもっている。つまり *it* のさす現実が二つ存在するからである。一つは死の現実でありもう一つは生の現実である。One side will have to go. つまりどちらかの現実が動かねばならないのだ。まだ死が来ないとすれば、この世の現実が来る。それもやはり受け入れがたく、しかも逃れられないのが分かっている冷たい世界である。そして夜が明けても救いは無く、太陽は無いのである。死ははっきりと存在しつつ、一方、つかの間のこの世界にも詩人が希求する癒しの太陽は無いのである。

ラーキンの太陽は、詩集 *High Windows* 以来、詩人独自の心象となって発展し、自らの生に見失い、希求し、拒絶される、神のように崇高な表象と

なって歌われつづけているのである。

注

ラーキンの詩の引用は全て *Collected Poems* ed. A. Thwaite London: Faber and Faber, 1988) による。

- 1) Barbara Everett, *Poets in Their Time* (London: Faber and Faber, 1986), p. 239.
- 2) Philip Larkin, "An Interview with Paris Review", *Required Writing* (London: Faber and Faber, 1983), p. 69.
- 3) James Booth, *Philip Larkin: Writer* (Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1992), p. 166.
- 4) Roger Day, *Philip Larkin* (Milton Keynes: Open University Press, 1987), p. 77.
- 5) A.T. Tolley, *My Proper Ground* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1991), p. 117.
- 6) cf. *Ibid*, p.120.